

Title	Studies of Optically Active Alcohols by Means of Vibrational Circular Dichroism
Author(s)	中尾, 公子
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38091
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	中 尾 公 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (理 学)
学 位 記 番 号	第 1 0 3 5 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 4 年 6 月 29 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 理学研究科 無機及び物理化学専攻
学 位 論 文 名	Studies of Optically Active Alcohols by Means of Vibrational Circular Dichroism (振動円偏光二色性分光法による光学活性アルコールの構造研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 京 極 好 正 (副査) 教 授 桑 田 敬 治 教 授 海 崎 純 男 助 教 授 菅 田 宏

論 文 内 容 の 要 旨

赤外円偏光二色性 (VCD) スペクトルは、分子の振動状態の遷移に基づいて観測されるため、電子状態の遷移に基づいて観測される紫外・可視領域の円偏光二色性スペクトルに比べて発色団の数が多く、光学活性分子の局所的な立体構造の研究への応用が期待できる。しかしながら、現在のところ、VCD スペクトルと分子の立体構造との間には、明確な対応づけがなされていない。また、VCD の生じる機構についても解明されておらず、分子の立体構造とスペクトルの対応づけとともに、VCD の機構についても明らかにする必要がある。

本研究では、種々の光学活性アルコールの OH 伸縮振動における VCD スペクトルと、分子の立体構造との関係を実験的に明らかにするとともに、Dynamic Polarization Model を用いて構造パラメータから旋光強度の計算を行い、実験結果の検証を行った。

Dynamic Polarization Model は、発色団の振動双極子のつくる電場内でまわりの置換基に生じた誘導双極子と、発色団の振動双極子との相互作用によって VCD の旋光強度が生じるという機構である。このモデルでは、発色団と置換基の幾何学的な位置関係と置換基の分極率の異方性が旋光強度に大きく反映される。

実測の VCD スペクトルと、NMR スペクトルの解析から得られた分子の立体構造に関する情報を対比させることにより、各々のコンフォメーションに特有の VCD バンドを見いだすことができた。また、モデルを用いた計算から 1, 2-ジオール、 β -メトキシアルコール、 β -アミノアルコールの分子内水素結合した OH 伸縮振動モードに観測される正の VCD は OH 結合に対して G^+ の配置にある C-C 結合の結合分極率からの寄与であることが示された。フェニルアルコール誘導体やビナフトールにおいても、スペクトルと分子構造の対応づけがなされるとともに、ベンゼン環やナフタリン環などの大きな分極率の異方性を有する置換基を導入することによる旋光強度の増強効果が見いだされた。

本研究によって、VCD スペクトルは分子の立体構造を鋭敏に反映し、光学活性分子の立体構造の研究に有用な手段であることが示された。

論文審査の結果の要旨

本研究では赤外領域の振動円偏光二色性（VCD）を一連の光学活性アルコールのOH伸縮振動について測定し、その強度、符号をNMRスペクトル等の解析から得られた分子の立体構造と対応づけた。さらに動的分極モデルに従って、構造パラメーターから施光強度の計算を行い、実験結果を検証した。このように光学活性分子についてVCDの実測値と構造との対応、理論計算の裏付けを系統的に行ったことは、博士（理学）の学位論文として十分価値あるものと認める。